



Title	＜女が読む小説＞を書くということ：文壇のジェンダー・ポリティクスと忘れられた「通俗小説」作家・加藤武雄
Author(s)	木村, 涼子
Citation	大阪大学大学院人間科学研究科紀要. 2016, 42, p. 343-368
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/57225
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

＜女が読む小説＞を書くということ

—文壇のジェンダー・ポリティクスと忘れられた「通俗小説」作家・加藤武雄—

木 村 涼 子

目 次

1. はじめに ひとつの符合：『資本論』と『大菩薩峠』
2. 文学史における「通俗小説」の位置
 - 2-1 戦前の文壇における「通俗小説」
 - 2-2 戦後の「大衆文学」再評価の中での「通俗小説」の周辺化
3. 文学者にとって「通俗小説」を書くことの意味：加藤武雄を中心に
 - 3-1 忘れられた「通俗小説」作家・加藤武雄
 - 3-2 「通俗小説」を書くことの葛藤
4. おわりに 文壇における性差別と文学史の改竄

＜女が読む小説＞を書くということ

一文壇のジェンダー・ポリティクスと忘れられた「通俗小説」作家・加藤武雄一

木村涼子

1. はじめに ひとつの符合：『資本論』と『大菩薩峠』

1996年、日本の哲学・思想史の第一人者である故今村仁司が『「大菩薩峠」を読む—峠の旅人』と題した書籍を発表した。『大菩薩峠』とは、中里介山によって1913年から30年近くかけて執筆され、戦前戦後に複数回映画化もされた、近代日本を代表する大衆小説の一つである。同じ1996年に今村は、フランスの哲学者たちL. アルチュセール、J. ランシエールらによる『資本論を読む』（全三巻）を翻訳・出版している。『資本論』とは、言うまでもなく、19世紀にカール・マルクスによって書かれた世界的名著である。

興味深いことに、発行はいずれも筑摩書房だ。社会科学の古典であるマルクスの『資本論』を現代的に読み解き、20世紀後半の欧米アカデミズムを最先端で牽引した書籍の翻訳タイトルを、今村は原著タイトル (*Lire le Capital*) に忠実に『資本論を読む』と名づけたわけだが、時を同じくして、彼自身が永年関心を抱き続けて来た大衆小説の「思想的核を読み解く冒険的試み」（ちくま新書の内カバー紹介より）に対してもまた、『「大菩薩峠」を読む』と名づけた。マルクスを読み解くアルチュセールたちに対して、中里介山を読み解く今村仁司。今村はこの両者を意図的（あるいは無意識のうち）に同じ地平に並べたといえよう。

この「符合」は偶然ではない。『大菩薩峠』をはじめとする時代物の大衆小説は、「大衆」のみならず、鶴見俊輔、尾崎秀樹、池田浩士など、多くの男性知識人を虜にし続けてきた。時代小説に魅入られる研究者は文学畑にとどまらない。思想史、社会科学系の研究者も時代小説を研究素材として好む。近年では、今村仁司に続き、日本近現代史研究の成田龍一（『「大菩薩峠」論』青土社、2006）、表象文化論の野口良平（『「大菩薩峠の世界像』平凡社、2009）など、アカデミズムの「第一線」あるいは「気鋭」の研究者が次々と大菩薩峠論を著している。戦後の大衆文学再評価と文学史の読みかえの流れの中で、中里介山や白井喬二など、戦前に人気のあった「時代物」大衆小説は、純文学と比して必ずしも「低級」と無視できるものではない、さらには、哲学の最先端とも肩を並べるものとして、その地位の格上げがなされてきた。

では、戦前の「大衆文学」ジャンルには「時代物」しかなかったのか、といえば、もちろんそうではない。都市においてマスメディアと大衆文化が本格的に開花する1920年

代には、大衆小説の世界にも新しい風が吹く。新風を象徴する記念碑的作品は、菊池寛による初めての新聞小説『真珠夫人』（1920年に『大阪毎日新聞』『東京日日新聞』で連載）である。『真珠夫人』は、明治時代に人気を博した尾崎紅葉・徳富蘆花・菊池幽芳らによる「家庭小説」での、運命に翻弄されながらも忍耐強く健気に生きる女性像とはまったく異なるヒロインを世に送り出した。『真珠夫人』の成功以降、菊池寛は、多くのすぐれた「現代物」の大衆小説をうみだしていく。菊池寛と相前後して、久米正雄など「純文学」サークルから徐々に大衆小説を執筆する人々がふえてくる。1920～30年代に活躍した「現代物」の「大衆小説」「通俗小説」作家といえば、菊池寛を筆頭に、吉屋信子、加藤武雄、中村武羅夫、三上於菟吉、舟橋聖一、山中峯太郎、小島政二郎、牧逸馬、三宅やす子、竹田敏彦と枚挙に暇がない（木村 [2004]、木村 [2006]）。

しかし、戦後の大衆文学再評価の中で、家庭や恋愛をテーマにした「現代物」の大衆小説、いわゆる「通俗小説」が取り上げられることは非常に少ない。「通俗小説」の文学史上の存在感の稀薄さは何に由来するものなのか。

本稿は、次節で、女性読者の誕生と大衆文学の発展、その中で女性を主な読者とする「通俗小説」の当時の文壇における位置、さらには戦後の文学史における周辺化の歩みを辿り、第三節で、「通俗小説」作家として戦前名を馳せたにも関わらず、戦後「忘れられた」作家となっている加藤武雄に焦点を当て、「通俗小説」を書くことに関わる苦悩や葛藤を描き出すことを試みる。最後に、「通俗小説」作家の置かれた立場を通して、文学と「女性」の関係について、ジェンダーの視点から考察する¹⁾。

なお、以下の議論の中で「通俗小説」という語について、二種類の意味内容が登場する。筆者が目する「通俗小説」とは、婦人雑誌や娯楽雑誌、新聞などで連載された、女性読者を主たるターゲットとする「現代物」の小説（主に長編）であり、いわば狭義の「通俗小説」概念である。これに対して、広義の「通俗小説」概念は、「現代物」だけでなく「時代物」「探偵小説」など、雑誌や新聞で連載された大衆読者向けの小説全般（主に長編であることは狭義と同じ）を指すものであり、時代や文脈によって「大衆小説」「大衆文学」と同義に用いられる。本稿では、引用以外の文章では、必要に応じて前者を「（現代物）通俗小説」あるいは「狭義の『通俗小説』」、後者を「総称としての『通俗小説』」あるいは「広義の『通俗小説』」であることがわかるように論述する。

2. 文学史における「通俗小説」の位置

2-1. 戦前の文壇における「通俗小説」

近代小説というものが誕生して以降、文壇はさまざまな潮流やジャンルを生み、互いにカテゴリー化や序列化を行ってきた。文壇におけるカテゴリー化・序列化のプロセスには、読者や作家の性別に影響される面が存在した。とりわけ女性読者層の増大は、文学ジャンルの序列化を進展させた。文学の領域におけるジャンル分けは、ある面ではジェ

ンダーによって色づけされていたのである。

飯田祐子は、明治30年代前半には人々を教化する働きをもつものとして高い評価を受けて迎えられていた家庭小説が、30年代後半になると「芸術」と「道徳」あるいは「芸術」と「通俗」という二項対立の図式の成立とともに、「芸術」より劣るものとして劣位に置かれる様を明らかにしている。そのプロセスは、まさに通俗的・陳腐な道徳や趣味を女性性と結びつける過程でもあり、飯田は「女性読者」を理念的・抽象的に排除することによって文学の男性ジェンダー化が確立していったと論じている（飯田[1998]）。

大正期以降、学校教育によるリテラシーの普及とマスメディアの大衆化は、大衆読者層の登場という社会現象を招いた。それまでよりも格段に多くの読者を抱えた新聞・雑誌は、発行部数の維持・拡大のために、連載小説に力を入れるようになる。それらには、「大衆文藝」「大衆小説」「通俗小説」「新聞小説」などの名称が与えられたが、それぞれをいかに定義し評価するのかについては、さまざまな議論があった。そして、その議論の中には、読者の性別、とりわけ女性読者の増大が文学を変質させるという指摘が何度も提起された（前田[1973]）。

まず1920年代の議論をみてみよう。

たとえば大宅壯一は「殊に近年に於ける最も著しい現象ともいふべき婦人の読書慾の増大」は従来の文壇の在り方をゆるがすものだと考え（大宅[1926]）、青野季吉は「文学に親しむ読者の範囲はいわゆる隔世の感があるほど拡張」されつつあり、「文学は最早や、女学生の机の下に秘められる文学でも、文学少女の懐に温められる文学でもなくなって、一般家庭の婦人、一般社会の女性の文学となっている」（312頁：青野[1927]）と警告を発する。マルクス主義者である青野は、「一般社会女性」といっても、その中心は「小ブルジョアジーの婦人」であると指摘し、彼女たちが好む文学は「多分に感情的要素を具え」「现实生活において見られぬような自由への躍進」が描かれる、「現実主義的浪漫文学」としての「通俗小説」となると論じた（320-321頁：青野[1927]）。

片山昇は1926年当時、「純文学」と「通俗文学」を区別し、「通俗文学」の読者を「そのうちの大部分は女性であるところの、広い意味のインテリゲンツィヤである」と規定する論文を書いている（片山[1926]）。そこには、男性読者こそが「狭義のインテリゲンツィヤ」であり、そうした「本来の・正統なインテリゲンツィヤ」と女性読者を切り分ける発想が読み取れる。「広義のインテリゲンツィヤ」であるところの女性は、「インテリゲンツィヤ」のレベルを低下させながら裾野を拡大する存在であり、同じくレベルを低下させながら文学の裾野を拡大するものとしての「通俗文学」と対応して位置づけられている。

新聞ジャーナリストであり文芸批評も手がけ、「新感覚派」の命名者として知られる千葉亀雄は、「通俗小説」について「小供の為の有毒な菓子」（千葉[1923]）と、否定的な例えで批判した。その二年後、森本巖夫は、『新潮』誌上で「みかん水」（森本[1925]）という例えを用い、子どもには魅力的な価値のあるものだと「所謂通俗小説」の意義を

擁護するものの、「純文学」と比較しての「低級性」を指摘する点では千葉と同じ認識を披露している²⁾。

1925年には、「時代小説（時代物／髻物）」作家である白井喬二らが中心になって二十一日会を結成、「プロレタリア文学」を意識しつつ、文学青年のための「文壇文学」（その後普及する「純文学」概念と同義ではないが、その源流の一つと考えてよいだろう）に対抗するものとして、勤労大衆のための「大衆文芸」概念を掲げ、雑誌『大衆文芸』を発刊するなど、大衆文芸運動を起こした。その動きが江戸川乱歩らの探偵小説家を巻き込み、平凡社から円本の形で「現代大衆文学全集」が刊行され好評を博したことから、「大衆文学」概念が広がることになる（鈴木[2009]）。その際、菊池寛を筆頭に、婦人雑誌などに連載されていた恋愛や家庭、社会風俗を扱う「（現代物）通俗小説」は排除された。「大衆文芸」や「大衆文学」が提起された1920年代、その名称を「（現代物）通俗小説」には使わせないという意思表示が、「時代小説」作家たちからなされたのである（94頁：鈴木[2009]）。一部のインテリゲンチヤのものである「文壇文学」との比較において、勤労大衆のための「大衆文芸」「大衆文学」の位置を高めるためには、勤労大衆カテゴリーから女性を排除する必要があった。「大衆文芸／大衆文学」から、女性が主たる読者と想定された「（現代物）通俗小説」を排除することは、すなわち、明治後期に「家庭小説」を始めとする大衆向け文学が女性読者と結びつけられ「芸術小説」より低位に位置づけられた状態から、ひとり「時代物」を救い出すことだったのである。

しかし、新聞や雑誌の連載小説がその力を増した1930年代になると、「通俗小説」を含めた「大衆文学／大衆小説」や「新聞小説」などの概念が普及していく³⁾。その流れを鈴木[2009]を参考に筆者なりに整理するならば、1920年代に「文壇小説」との対比で、「時代小説」と「探偵小説」を構成要素とする「大衆文芸」運動が勃興し、マスメディアの大衆化が一層すすむ1930年代には「芸術文学」「純文学」との呼称との対比で、「時代小説」「探偵小説」に「（現代物）通俗小説」を加えた総称としての「大衆文学／大衆小説」ジャンルが成立する（ただし、1930年代以降も、総称としての「大衆文学／大衆小説」と同義で、総称としての「通俗小説」が用いられることはままあった）。そしてそれらが「純文学」より劣位におかれている状況を確認した上で、文壇上の地位と内容の向上を訴えるジャーナリストたちの発言が目立つようになる。

先述のように1920年代に「通俗小説」を批判した千葉亀雄は、1930年の「新聞小説論」において、「一般批評が新聞小説を批判する場合に、『新聞小説』なるカテゴリーの下に行われ、「純文学」「高級文学」とそれが区別されることに異議を唱えた（16頁：千葉[1930]）。千葉は「新聞小説」が民衆に与える社会的影響力の重要性を強調した上で、現在、新聞読者層が広がったことで、新聞小説に求められるものが異なりつつあると述べる。その際女性読者の増加による望ましくない変化が生じていることに注意を促している。「家庭小説を含む多くの新聞小説には、伝統的なモラル・トンが強く求められる。- 中略 - それに過剰な感傷性と、目出度し目出度しのハッピー・エンドが、大抵の読者の

要求する通俗小説の的である。勇敢に時代道徳に反抗し、社会意識を革命する作意になったものは断然ボイコットされる危険性さえもある。そこで人物は類型であり、浅薄な功利性でメッキされ、反抗性を甘く眠らすような砂糖水的な妥協味が通俗小説のこつである」(18-19頁：千葉 [1930])。先述した1923年の「小供の為の有毒な菓子」という表現から、今回は「砂糖水」という相対的に穏当な例えに変わっているが、批判的な視点は一貫している。

千葉亀雄は新聞のことを「民衆教化機関」と認識し、だからこそ「伝統的なモラル・トン」や「過剰な感傷性」に満ち、「目出度し目出度しのハッピー・エンド」に特徴づけられる「通俗小説」(千葉の文脈では女性読者向けの「現代物」を意味する)ばかりではなく、現実を批判的にとらえる「純芸術」的な小説が掲載されるべきだと主張するのだが、新聞と同じく、あるいはそれ以上に「民衆教化」機能を担っている学校教育が、女性に「婦人道徳」や「良い結婚・家庭」重視の価値観を伝える良妻賢母主義教育をおこなっていることには無自覚なようである。女性の意識を「保守的」「非社会的」なものにする「教化」作用をもつ社会システムについて批判的に言及することなく、まるで、女性がそもそもその性質として「伝統的」であり「ハッピーエンド」を好む「感傷的」な傾向を持つゆえに、文学の「健全」な発達を妨げると言う論調は、生物学的還元主義的な性差別言説の典型といえよう。

同じ頃、『婦女界』の編集者であった都河龍は、「ただ遺憾なのは、婦人雑誌の文芸欄が、世の文芸批評家に、全然没却されていることである」「頭から低級なもの、卑俗なもの、芸術的価値なきものとして、一顧の値をも認めようとされていないことである」(219頁：都河 [1931])と、婦人雑誌に連載している小説イコール「低級」という見方があることを批判的に指摘している。文壇、文芸批評の世界には実際にそうした見方があったことの証左である。それに対して都河は「だが、事実は決して然らずである」、「変な色眼鏡をかけて、よく読みもしないで」批評するのは「甚だ迷惑だ」(219-220頁：都河 [1931])と主張する。だが、その言葉に続いて、「それは兎に角として、私が婦人雑誌の編集者として、常に作家にお願いする重要点は、その作家の有する芸術の力を十分に発揮して頂きたいということである。-中略-婦人雑誌なるが故に、投げてかかって貰っては困るのである。特に調子を下げられても困るのである」(220頁：都河 [1931])と、「編集者の願い」を訥々と述べている。ひるがえせば、やはり婦人雑誌に作品を書く場合に「投げてかかる」作家が一部であれ実際に存在したということであろう。

美術史研究者で文芸評論も手がけた伊集院齊(相良徳三)は従来の大衆小説は、真実性がない(事件が空想的過ぎる、人物が生活を持っていない、全編が余りに構成的に過ぎる)、道徳的な批判に欠けているという欠点を持っていると述べた上で、以下のように指摘する。「今日では、知識階級の数は殖えつつある。中学校、女学校、専門学校、大学などの増設は、明らかにそれを物語っていると思う。而も、彼等は種々な理由によって所謂芸術小説には親しむことが出来ない。こっそりと大衆小説を開いては見るのだが、

それにも十分の満足が出来ない。数量的に増大しつつある彼等は、もっと高級な大衆小説、言い換えれば、文学的な価値のある大衆小説を要求している」(27-28頁:伊集院[1935])。

1920年代に文学の変質(おそらくは劣化の方向で)をもたらすと警戒された女性読者は、1930年代には無視できない存在として意識されるようになり、その結果、知識人の間では女性も含む大衆読者層に良質の文学を提供すべく、「通俗小説」の質を高めるべきだという議論が生まれていることがわかる。

とはいえ、「通俗小説」を書くことは、文学者にとって劣等な評価を受けることにつながった。「純文学」でも「通俗小説」でも活躍し、そして文藝春秋社を興し、文芸ジャーナリズム界を大きく動かしした菊池寛についても、彼が『真珠夫人』以来通俗小説を多く執筆した理由について、河上徹太郎は、「転向」という言葉を用いて考察している(213頁:河上[1949])。こうした状況下で作家が「通俗小説」を書く際には、ある種の葛藤が生じたであろうことが推測される。その点については、第3節でくわしく扱う。

2-2. 戦後の「大衆文学」再評価の中での「通俗小説」の周辺化

第二次世界大戦後、文化をもとめる人々の熱意を背景に、文学はかつて以上の勢いを急速にとりもどしていく。戦前作品の復刊から新作の発表と、マスメディアの復興とともに、多くの文学が生み出されていった。戦後復興が軌道にのった1950年代後半・60年代頃から、戦前の文学の再評価と戦後文学の新潮流の整理に向けて、文壇内での序列の再編成がなされる。

戦後もまずは、「純文学」とそれ以外(戦後新たに生まれた「中間小説」概念、戦前より引き継いだ「大衆文学」「大衆小説」概念)の区別が重要な論点となる。

谷沢永一が、戦後の「純文学の縄張り争い」に関して、興味深い記録を残している。昭和38年の中央公論社版『日本の文学』全80巻の編集会議で、中央公論社側が松本清張、大佛次郎、獅子文六を入れてほしいというのに対して、谷崎・川端・伊藤・高見・大岡・三島・キーンら編集委員側が松本清張を入れることに激しく抵抗したという。三島由紀夫は松本清張を入れるならば、自分は編集委員をやめて、自分の作品の収録も断るとまで主張し、中央公論社側は断念せざるを得なかった。しかし、僅か5年後の43年に『三島由紀夫集』を皮切りに刊行した『新潮日本文学』全64巻には、松本、大佛、獅子はすべて含まれていた。また、昭和43年に刊行開始の筑摩書房による『現代日本文学大系』全97巻について、三島は「みじんも妥協のない編集」と称えたが、この中にも大佛、獅子は含まれていたという。このエピソードについて谷沢は「(筆者注:戦後の)純文学の縄張り主義が最終的に崩れたのは、昭和四十年代初頭のことであるらしい」と結んでいる(195頁:谷沢[1978])。

「純文学」中心の日本文学史、文学全集の編纂が多い中で、1950年代、60年代に「大衆文学」を再評価する動きが生じてくる。しかし、1930年代には「時代物」「探偵物」「ユーモア物」と並んで「(現代物)通俗小説」も含んだ、総称としての「大衆小説」・「大衆文

学」概念が一応成立していたにもかかわらず、戦後の「大衆文学」再評価はあくまでも「時代小説」中心のものだった。

戦後すぐ1948年、ドイツ文学者として知られ戦前から大衆文学論に取り組んできた中谷博が『思想の科学』に発表した「大衆文学の歴史」は、「これは通俗文学に関する議論ではない」とまず宣言する。彼は「大衆文学」と「大衆的文学」を区別し、後者は前者より本質的に劣るものとする。彼の認識枠組みでは、「(現代物)通俗小説」は後者に該当する。「今日『大衆文学』の名によって無差別に呼びならわされているものの中に、一つの明確なる差別を打ち樹てんとして試みられる議論である。端的に言えば本来の大衆文学そのものと、今日の大衆的文学(即ち通俗文学)との間に本質的差異の存在することを主張して、両者の間に明確なる一線を画せんとして企てられる文学論である。」「大衆文学と大衆的文学とその字面が似ているからとて、これを同一視することは許されない。両者の間には厳然たる本質上の差別が存在している。即ち大衆文学は文学であるが、大衆的文学(通俗文学)は文学でないからである」(7頁:中谷[1948])。実に激烈な「(現代物)通俗小説」排除の言説である。

中谷の熱を帯びた宣言には、「大衆文学こそはプロレタリア文学と時代を同じくして生まれ出たところの、新興文学であったことだけは強調して置かなければならない」(10-11頁:中谷[1948])との思いがあった。前述のように、大衆文芸＝「時代物」小説をプロレタリア文学との関係で考える志向性は戦前から存在し、思想の科学研究会はそれをある程度受け継いでいたのだろう。

しかしながら、中谷自身、時代小説を代表する名作とする『大菩薩峠』について「しかし当時なお知識人の社会的地位が黯然であったが故に、こうした剣の舞いはそれこそ幼稚で低級な殺伐さと見られて一向に歓迎されるところなく、徒らに婦女子や年少の者、さては無知識階級の単なる娯楽品として、全く講談か浪花節と同じような取扱いをされていたに過ぎなかった」(12頁:中谷[1948])と述べる。中谷の筆は、その後『大菩薩峠』が偉大なる文学の一つとして発見されるという話につながるわけだが、彼が『大菩薩峠』の価値を語る際に、その対比物としてわざわざ「婦女子や年少の者、さては無知識階級の単なる娯楽品」との表現を用いていることが目をひく。プロレタリア文学の勃興を称揚しつつ、「無知識階級の単なる娯楽品」なる、学歴のないもの、あるいは労働者階級への蔑視に満ちた表現を用いていることは、読み手をして眉をひそめさせる。さらに、ここで問題とするジェンダーの視点からいえば、学歴や階層に言及することすらなく「おんなこども」をひとまとめにして、それらが喜ぶものは、すなわち低級であるとの意見表明は、小説の序列が読者の性別によって決められていたのではないかとの推測を裏付ける。知識のある男性が喜ぶ「娯楽品」であれば文学として価値が高いという、実に素朴と言わざるを得ない判断基準は、1934年の中谷の「大衆文学本質論」でもすでに披瀝されている(中谷[1934])。彼は当時、「知識人」「大人」(性別は言及されていないが、中谷が男性を想定していただろうことは想像に難くない)向けに書かれた作品こそ、「大

衆文学」の名にふさわしいという議論を展開していたのである。中谷の論調は、戦前の「大衆文芸／大衆文学」から女性向けの「(現代物)通俗小説」を排除する流れを、戦後に復活させ引き継いだ典型例と言えよう。

1950年には桑原武夫も、「当時(戦前)の文壇文学者は小さい題材を克明に描き出すことを芸術と心得、大がかりなものは通俗文学として軽べつすることによってみずからを慰めていた」(86頁：桑原[1950])との問題意識から、「純文学」と「通俗文学」の区別とそれぞれの意義について論じている。ただし、桑原は「通俗文学」の代表的なものとして中里の『大菩薩峠』、直木の『南国太平記』、菊池寛の『真珠夫人』、吉川の『宮本武蔵』を挙げているので、彼の「通俗文学」概念は広義である(すなわち広義の「大衆文学」概念と同義)ことに留意されたい。

桑原は、「真の文学と通俗文学との差異」について「前者が人生において一つの新しい経験を形成しているのに対して、後者は新しい経験を形成していない」(63頁：桑原[1950])、「すぐれた文学は生産的、変革的、現実的」「いわゆる通俗文学は、価値については再生産的、精神については温存的、性格は観念的」(65頁：桑原[1950])と論じる。「すぐれた文学は初登攀であり、通俗文学はハイキングである。(日本独特の私小説は、自分の家の庭ばかり見ている人といえるだろう。)」(67頁：桑原[1950])などは、よく知られた桑原の分類である。桑原は、「ハイキング」ばかりではいけないが、「ハイキング」には「ハイキング」の良さがあると、「(現代物)通俗小説」を含めた広義の「通俗文学＝大衆文学」を擁護する。

しかし、1950年代、60年代に、尾崎秀樹や鶴見俊輔らによって本格的に「大衆文学」研究がすすめられるようになると、「(現代物)通俗小説」排除の傾向は強まっていく。時代小説と現代小説(「(現代物)通俗小説」)の差別化は、田岡典夫や長谷川伸、白井喬二など時代小説作家自身によって声高に主張された。彼らの主張は、「大衆小説」と「(現代物)通俗小説」は区別してほしい、「(現代物)通俗小説」は「大衆小説」の名に値しないというものだった。1954年、白井喬二は「レベルの低い層の作品を大衆文学からはずしたいとする<最低限切捨て論>」(井口[1965])を宣言し、「(現代物)通俗小説」を<切捨て>対象と位置付けた。そうした作家自身の差別化の認識に沿うような形で、大衆文学研究もすすめられてきた。大衆文学について多くの著作を残した尾崎秀樹は、「時代小説」のみが「大衆文学」の名にふさわしいのは、それが「庶民的伝統にもとづく文学の発展としてあった」ためであり、「(現代物)通俗小説」に対しては「内容的には硯友社や自然主義文学の亜流にすぎず、菊池寛たちの努力も、けっきょくは時代の風俗をうつすことに落ちついたために、それほど状況を変えることはできなかった」(148頁：尾崎[1965])との低い評価を下している。

以下、文芸評論家や研究者など、男性知識人の同様の言説を確認していこう。

戦後文芸評論家として活躍し、漱石研究者としても知られる荒正人は、1959年に「大衆文学史」をまとめているが、この中でも主として取り上げられるのは「時代物」である。

「現代物」にも一応触れてあるが、時代物の解説の詳しさに比べると違いは明らかである。「時代物」では『大菩薩峠』『富士に立つ影』『鳴門秘帖』『宮本武蔵』など代表的な作品についてはそれぞれあらすじや社会的影響力などが、すべての時期にわたって詳しく記されるのに対して、「現代物」では菊池寛の『真珠夫人』の作品論があるだけで、おおよそ時期毎に「通俗小説では菊池寛、久米正雄がやはり中心であった」に始まり、加藤武雄を含んだ何人かの作家名が挙げられるにとどまる（荒[1959]）。なるべく包括的に大衆文化史を整理しようとする意図は感じられるが、「現代物」の位置づけに注目して見直した場合、荒正人自身の関心も意欲も「時代物」に大きく傾いていることがわかる。

次に、思想の科学研究会を率い、今も多くの文化人からの尊敬を集める鶴見俊輔の場合をみてみよう。鶴見は、1964年5月13日の『東京新聞』において、尾崎秀樹の『大衆文化』を書評し、大正半ばから50年間続いてきた大衆文学に関する論争に「一つの確実な歯止めをつくった」と、大衆文学論争の結着点として大きく評価している。鶴見は述べる。「(尾崎の考える大衆文学の定義は)大衆文学はもともと作者のいない文学だという考え方である。中世社会をうちこわしていく封建社会の民衆の願望が、歴史の実録に形をかりて、数々の虚構の伝説をつくった。この伝説の延長線上に、大正以後の職業作家が心をおいて書いた時、そこに生まれたものが、大衆文学なのだ。だからこそ、たとえば菊池寛作の『真珠夫人』や『貞操問答』などの現代もの通俗小説は当時熱狂的に読まれはしたが、わずか四、五十年の今日だれも主人公の名前をおぼえていないのに反して、中里介石の『大菩薩峠』の机龍之介、佐々木三津三作『右門捕物帖』のむつり右門、大仏次郎の鞍馬天狗、吉川英治作の宮本武蔵は、つくられた後四十年、五十年の今日まで民衆とともに生きつづけて来た」(455-456頁：鶴見[1975])。

鶴見俊輔は、鞍馬天狗について、宮本武蔵について、頻繁に論じている。おおよその場合、におそした「鬻物」、「時代小説」に対して彼は擁護的である。たとえば、戦前に長谷川如是閑による批判に以下のように反駁している。「長谷川如是閑はかつて、まげもの小説の復活を政治的反動と直ちにむすびつけて非難した。『政治的反動と芸術の逆転』(『中央公論』一九二六年八月)という文章である。この文章は、その後の三十年間に他の批評家のくりかえして来た大衆文学批評への原型となった。だが、鬻物小説のように前の時代に託して人生をえがく方法は、目の前の状況についてのみえがく風俗小説の方法に比べて、現実批判のエネルギーをより多く含むこともできるのだ。小説の中で過去をさしている意味は、同時に、未来をさすものでもあり得る」(166頁：鶴見[1975])。

注目したいのは、長谷川川の議論に反駁する際に、「風俗小説」(「(現代物)通俗小説」と解釈してよかろう)を引き合いに出し、「風俗小説」との比較において、「時代小説」の意義を論じていることである。「時代小説」は歴史的舞台をかりることによって現実への批判的精神を表現することができる。このロジックは、尾崎秀樹をはじめとする大衆文学研究会や鶴見俊輔など、戦後における大衆文学再評価の議論に共通するものだ。このロジックが繰り返される度に、逆に大きな問いが浮かび上がる。なにゆえ、現代風俗

を直接に題材とする「現代物」大衆小説には、現実批判が不可能なのだろうか。その理由として、彼等が挙げるのは、「大衆小説の代表する思想は、大資本家および支配階級が、大衆にかく信じて欲しいという思想」(91頁:鶴見[1975])であり、「現代物」は「時代物」よりもその磁場からのがれにくいという理由である。単純化すると、大衆には、支配階級の意志を相対化したり、そこから自由になる力が弱い、相対化の装置として「歴史」を用いる点に「時代物」の優位性があるというロジックであるが、この主張への反論は様々に考えることができよう。

鶴見や尾崎が大衆小説を論じる際、「(現代物)通俗小説」について全く触れないわけではないが、それは菊池寛の『真珠夫人』や吉屋信子がわずかにとりあげられるにとどまるし、議論の中心に置かれることはない。尾崎は鶴見と同じく戦後いち早く大衆文学再評価の必要性を感知し、大衆文学研究会を主催、雑誌『大衆文学研究』を1961年から66年まで発刊しながら、着実に大衆文学研究を蓄積してきた功労者である。尾崎が、「(現代物)通俗小説」についても基本的な知識や視点をもっていたことは、「昭和前期の家庭・通俗小説」(尾崎[1980])という短いながらも的確な概説を書いていることからわかる。しかしながら、彼の関心はおそらく「時代物」にはじまり、大衆文学についての諸理論を整理し、作家/作品論を積み重ねるうちに、ますます「時代物」に収斂していったことが推測される。

1980年代にはルカーチ研究者として知られる池田浩士が、本格的に大衆小説研究に乗りだし、『大衆小説の世界と反世界』(池田[1983])を出版する。彼がこの著作で注目したのも主として「時代物」であった。雑誌『國文學』が大衆文学特集を組んだのは1986年のことだが、この時の諸論文は益田勝実の『大菩薩峠』論に始まり、尾崎秀樹、池田浩士、紅野敏郎などほとんどの論者が「時代物」に注目している。『新青年』再評価の時期でもあったので、探偵小説やSF小説を扱う論も掲載されていたが、作家紹介や大衆文学の名作紹介の記事においても、戦前から活躍の作家については特に「時代物」ばかりに光が当てられている。

1990年代のインパクト出版会からの『文学史を読みかえる』シリーズでも、大衆小説を扱った第二巻『「大衆」の登場 ヒーローと読者の20～30年代』(池田浩士責任編集)の内容の中心は、『大菩薩峠』であり、雑誌『新青年』であり、プロレタリア文学である。座談会から論考までほとんどが男性の語り手・執筆者であるが、彼等の認識枠組みには男性作家と男性読者のことしか可視化されていないのではないかとの印象を持つ。黒澤亜里子による吉屋信子などの女性作家に関する論考と、秋山洋子によるコロンタイの『赤い恋』に関する論考の2本が掲載されているが、女性のことは女性にまかせて特定課題でとの、一種のゲットー化が読み取れる。

著名な評論家加藤周一の著作も無視できない。加藤の『日本文学史序説 下』(加藤[1980=1999])は、幕末から戦後までの日本文学史を描いているが、この中に大衆文学的なものはほとんど含まれていない。マスメディアが大衆化した時期を扱った「第十一

章「工業化の時代」において、中里介山の『大菩薩峠』と大仏次郎『鞍馬天狗』と吉川英治『宮本武蔵』が取り上げられている程度であるが、それでも、それぞれの作品についてはきちんと論じられている。「(現代物) 通俗小説」分野では、菊池寛のみがかるうじて触れられているに止まり、それも「大衆小説で成功して文藝春秋社を興した菊池寛」(407頁：加藤[1999])といった実に短い記述があるのみで、作品についてはまったく論じられていない。吉屋信子に至っては、名前すら一度も登場しない。加藤の描く日本文学史は「純文学」中心であるが、それはほとんどの日本文学史や近代文学研究に共通のことで、彼の場合大正期半ばから昭和初期には大衆小説が勃興したことを意識していた点で多少とも視野の広がりを感じる。しかし、婦人雑誌や新聞において女性読者を主たるターゲットとしていた(実際には男性も読んでいたと思われるが)「(現代物) 通俗小説」については完全に無視をしている点が印象深い。

その加藤周一をして、「はじめて大衆芸術を、通俗小説から『いろはかるた』まで、分析し、評価し、歴史的に位置づけ」、その「問題発見能力は、水際だって」(519頁：加藤[1999])いたと絶賛せしむる鶴見俊輔(と思想の科学研究会)は、前述のごとく、もっぱら「時代小説」に注目し、「(現代物) 通俗小説」を積極的に「発見」することはなかった。

21世紀のものでは、安岡章太郎・井上ひさし・小森陽一(2003)、『大衆文学 戦前編』(井上ひさし・小森陽一編著『座談会 昭和文学史三』集英社)をとりあげよう。この座談会は、大衆文学の定義論から入り、戦前の大衆小説について鼎談しているが、具体的な作家としては菊池寛を皮切りにしつつも、例に漏れず話題のメインは『大菩薩峠』であり『鞍馬天狗』であり『宮本武蔵』である。菊池寛の作品としてはやはり『真珠夫人』がとりあげられるのだが、作品名を口にした小森も、中学生の時に読んだという安岡も、また井上も、その内容に特に関心がない、あるいは実はまともに読んだことすらないのかもしれないことが推察される語り口である⁴⁾。『宮本武蔵』について語る熱っぽさとは対照的だ。

尾崎秀樹による、『大衆文学の歴史』(尾崎[1989])は、尾崎の大衆文学研究の集大成ともいえる。上下二巻本のうち、上の戦前編は、大衆文学を「時代物」に意識的に限定して執筆されている。この二巻本は、いわば大衆文学史の決定版、いわば「正史」としての扱いを受けており、尾崎のこの労作によって、大衆文学史から「(現代物) 通俗小説」は明確に排除されることとなった。

こうして戦後に大衆文学研究がすすむ中で、『真珠夫人』の菊池寛と、「女性領域」に位置する吉屋信子だけが文脈中あたかもエクスキューズのように浮上するのみで、恋愛や家庭に関わる「現代的」課題や葛藤を描いた「(現代物) 通俗小説」の歴史は着実に周辺化されていった。結果として、「(現代物) 通俗小説」は「大衆小説」「大衆文学」からも排除され、作品も作家も忘れられていくことになる。歴史とは常に書き替えられていくものであるが、「文学」の歴史のみならず「大衆文学」の歴史もまた、戦後に、戦前の記憶が遠のく中で、男性中心のものへと再編成されたのである。

戦前戦後を通じて、「大衆文学」から、婦人雑誌や新聞に連載された現代物の「通俗小説」を排除したいという欲求の中には、読者としての女性の能力や価値観を低く見る、いわば旧弊な男尊女卑の思想がかくされていると思われる。しかし、あらためて問いたいのは、時代物＝男性、現代物＝女性という図式は果たして現状に合致していたのかということだ。戦前には本も雑誌も新聞も貴重な情報源・娯楽であった。市場は部分的にジェンダー化されていたが、日常生活の場面では、新聞や『キング』の「時代物」を女性も読んだであろうし、恋愛や家庭、都会風俗を扱う「現代物」を男性もまた読んでいた光景を思い浮かべる方が自然である。

ここに、戦後すぐに行われ、戦前の状況をうかがい知ることができる、思想の科学研究会の佃実夫による貴重な読書調査「勤労者の読書と大衆文学 どのようなものをどのくらい読むか」（佃 [1954]）がある。この論文は、佃が戦後すぐに貸本店を経営した経験から、貸本台帳を基に、勤労者がどんな本を読んでいるのかのデータ（昭和24年1月・2月の二ヶ月間、一月に平均十冊程度借りる顧客15人分：女性6、男性7、不明1 分析対象の書籍の総計は276冊）を提示している。このデータで興味深いのは、加藤武雄の『珠は砕けず』や菊池寛『受難花華』など、文学史上女性向けと位置づけられている「（現代物）通俗小説」を男性もさかんに読んでいることである。一年間で借りた本を「時代もの」「現代もの」「探偵もの」「ユーモアもの」「その他」の5カテゴリーで各人毎に集計した結果、「時代もの」より「現代もの」を多く借りた男性は8人中5人にのぼる。「時代もの」は一冊も借りていない男性もいる。また逆に「時代もの」を非常に好む女性も6人中1人であるが、存在する。

「（現代物）通俗小説」は男性も読んでいた。戦前から何人もの男性知識人が「（現代物）通俗小説」イコール「低級」を説明する際に論拠とした、女性読者の関心の狭さ・感傷性・保守性という「女らしさ」に関する特性論は、実は論者の先入観に過ぎなかったのではないか。性別のみならず、階級性、社会階層を意識した議論もあったが、それらは戦後は主要な論壇にはほとんど登場しなくなり、性別のみが「（現代物）通俗小説」の流れを不可視化する形で作用してきたといえよう。

「現代物」の大衆小説、すなわち狭義の「通俗小説」が、女性のみ読むものという偏見および女性に対する差別意識と結びついた形で価値剥奪を繰り返される下で、当の「（現代物）通俗小説」の作家たちはそのことをどのように受けとめていたのであろうか。次節では、「（現代物）通俗小説」の価値剥奪プロセスにおいて、その存在がかき消されてきた作家の典型例として、加藤武雄を取り上げ、通俗小説作家の苦悩や葛藤の一端を描き出すことを試みる。

3. 文学者にとって「通俗小説」を書くことの意味：加藤武雄を中心に

3-1. 忘れられた「通俗小説」作家加藤武雄

加藤武雄は1888年に神奈川県で生まれ、高等小学校卒業後、小学校の訓導を経て、1910年23歳の時に上京後、農民文学を志向しつつも、新聞・雑誌などメディア大衆化の波に乗って大衆小説を書くようになり、1956年に没するまで活躍しつづけた流行作家である。

「通俗小説」の代表的作家として、尾崎秀樹は久米正雄・菊池寛・吉屋信子・中村武羅夫・加藤武雄の5人を挙げている（尾崎[1986]）。加藤武雄・中村武羅夫・三上於菟吉は、3人だけで新潮社から全28巻もの『長編三人全集』（新潮社、1930年）を出すことに成功している。加藤武雄はことに多作で知られており、筆者が調べた限りでは1920～30年代に実に90作品を超える長編の「通俗小説」を発表しており、その多くが映画化もされている（木村[2010]、木村[2015]）⁵⁾。

実家の没落により中学校進学を断念した加藤は、小学校の教員となるものの、文学の志を捨てきれず、田山花袋が主催する『文章世界』の常連投稿者として「加藤冬海」のペンネームで活躍し、文学を志す若者の間ではある程度知られた存在であった。投稿仲間である中村武羅夫が先に上京して佐藤義亮の新潮社で働くようになっていたことから、中村を頼り1910年に上京、加藤も新潮社で記者・編集者の仕事をするようになる。本人の希望は「農民文学」作家として身を立てることであり、『郷愁（後に「土を離れて」と解題）』『夢見る日』『悩ましき春』などの小説集を発表し、新進作家として期待される評価を受けていた。その一方、『婦人之友』から連載を依頼されて執筆した『久遠の像』が予想以上の好評を博し、それによって彼は「通俗作家への転向の第一歩」（173頁：安西[1979]）を踏み出すこととなった。その後、『母』（1923年『報知新聞』）、『新生』（1924年『主婦之友』）と次々に新聞雑誌に長編現代小説を発表して、流行作家の地位を確立していく。あちこちの新聞雑誌にひっぱりだこの売れっ子作家となった加藤武雄は、長編の「恋愛小説」「家庭小説」を毎年何作も生みだし、1930年代、40年代には、一般読者にもおなじみの有名人として婦人雑誌の座談会や新聞社主催の講演会などに起用される存在となる。

先述の戦後すぐの佃[1954]の調査では、15人の読書記録を作家別に集計したところ、第一位が加藤武雄で36冊、二位吉川英治16冊をはるかにしのぐ。限られたデータだが、加藤武雄が戦前戦後すぐの頃、いかに人気作家であったかを推測させる結果である。

加藤武雄は大正期末から昭和初期にかけて、大量の通俗小説を新聞・雑誌に発表し、当代を代表する流行作家であった。にもかかわらず、彼を文学批評の対象として取り上げた研究論文は極めて少なく、管見のかぎりでは、彼が初期に志した「農民文学」作品を取り上げているものがわずかにあるのみである（山本[1995]、椋棒[2013]、山本[2015]など）。加藤武雄の業績や評価については安西愈氏や和田傅氏によって掘り起こされたものがあるが、それらは加藤の農村小説・郷土小説こそが評価されるべきものとして中心に据えられた形でまとめられている（安西[1972]、安西[1979]、和田[1982]）。

たとえば、山本昇による「加藤武雄ノート」は、『悩ましき春』をはじめとする加藤の

「郷土小説」「農民文学」系の作品を中心に、彼が農民文学を志しながら、「家庭小説の迷路に踏み込」む経緯や「加藤武雄が、理想とした郷土小説家から家庭小説家へと屈折して行った原因」(41頁：山本[1995])について考察している。

菊池寛や久米正雄と並ぶような、流行大衆作家といった評価は、昭和初期から戦後にかけての雑誌記事や文学批評に数多く見出すことができる。しかしながら、当時からすでに加藤に対して、「通俗小説作家」との理由をもって、その地位を引き下げる力学がさまざまな形で働いていた。戦後においても、加藤武雄についての研究のほとんどが、農民文学や郷土小説に焦点をあてたものであり、流行小説作家として活躍した「(現代物)通俗小説」に関するものはほとんど存在しないし、「(現代物)通俗小説」の流行作家であったことは、「迷路」であり「屈折」としてとらえられるのである。

3-2. 「通俗小説」を書くことの葛藤

加藤が「(現代物)通俗小説」を書くことに葛藤を抱えていたことは、加藤自身もさまざまな場に残しているし、残された史料やご親族へのインタビューなどからわかってきている。

まずは加藤自身の文章から、「通俗小説」作家としての忸怩たる思いの吐露をいくつかみてみよう。

「それにしても、此頃の売文生活は、省みて忸怩たるもの無き能わずだ。近頃では、僕も完全に通俗小説家になってしまったようだが、僕は、通俗小説を決して無意義なものとも、又、ある意味では決して低級なものとも思ってはいない。にも拘わらず、僕が、このいたづらにインキに塗れたる手を呪い度いのは、通俗小説にしろ、今書いて居るようなものでは仕方が無いことを知っているからだ。僕は一つは僕自身の生活の必要上、この方面の仕事をも続けていく覚悟だが、このままでは駄目だと痛感している」(57-58頁：加藤[1935])。

「若干の空名に駕する売文生活。一篇といえども、眞に自ら好むところを題した事が無く、一行といえども自ら題して書いた事が無いような売文生活。その売文生活の無意味さが、犇々と省みられて来る」(24頁：加藤[1936a])。

「たまたま、『婦人之友』に持まれた長編「久遠の像」が好評を受け、続いて『主婦之友』に長編を書き、幸いにも通俗小説家として認められ、朝日新聞、毎日新聞その他に長編を書き、田舎に残した家の方にもなかなか金の要るところから、ついに一個の通俗小説家となし了したのである。これは自分の志ではなかったと言ってみたところではじまらない。要するに、私の才の不足、実力の不足を、かつ恨み、かつ恥ずるのほかなき次第である」(200頁：和田[1982]、もとは加藤[1946b])。

加藤武雄が抱いていた内面の葛藤には、さまざまな側面があったと考えられるが、ここでは「通俗小説」を書くことに直接関わる葛藤を考察したい。

加藤には、婦人雑誌や新聞を舞台に現代風俗や恋愛・結婚・家族をテーマにした連載

小説家として活躍することについて、生涯をとおして大きな葛藤を抱え続けていた。女性向けの大衆小説を意義あるものとして書きたいという欲求、女性向けの大衆小説を「通俗小説」と蔑視する風潮への抵抗を感じつつも、それらと裏腹に本当に書きたい小説はこれではないという焦燥に常につきまわっていた。加藤は「通俗小説」を書く自分を嫌悪し、卑下する一方で、お金のためだけではなく、価値ある＜女が読む小説＞を書こうとして、女性の弱い立場を徹底して描く、女性を救うための作品を目指し始める。

1922年に「久遠の像」を発表し、婦人雑誌や新聞に「現代物」の連載を次々と手がけて以降、加藤は折々に、広い読者を意識した小説を書くための心構えや理念について語っている。そうした文学論において、「通俗という事が、直ちに低級と解せられ非芸術的であると解せられる」風潮を批判し、「小説という形式のもつ芸術的職能は通俗にしてはじめて遂げ得るのであると。我等は決して通俗を排斥してはならない。排斥すべきものがあれば、それは通俗ではない、媚俗である」(43-44頁：加藤[1932c])と、自身が痛感していた「通俗小説」蔑視の考えに明確な抗議を表明している。

流行作家となった後も、「農民文学」隆盛を支援する姿勢を保ちつつけるが、自ら発表する作品の多くは「(現代物)通俗小説」の範疇にあるものであることに悩みつつも、活躍当時は相応の意欲をもって取り組んでいたことが、同時期に著した小説論にあらわれている。彼は、家庭小説には「道徳性」「情緒的」「救い」が必要であると述べ(加藤[1933])、「通俗小説は日常生活における一般大衆の精神食物である」からして「生活を墮落させたり、絶望させ頹廢させるやうなものであってはならぬ」(212頁：加藤[1940a])と、道徳性が重要であることを強調している。彼が女性読者を意識して作品を執筆する際、女性大衆にとって必要な「精神食物」の要素が何であるかを考えていたに違いない。これらは当時「芸術小説」「純文学」概念を掲げて確立された「文壇」に対する対抗的な意思表示であると同時に、加藤が「通俗小説」に取り組む際、自らに言い聞かせていたことでもあるに違いない。

加藤は、若き日に田山花袋から自然主義文学の洗礼を受け、のちにトルストイに心酔するが、トルストイのみならず、ある時はゾラを、ある時はモーパッサンを、ある時はフローベル、ユーゴーを引きながら、「私小説」「心境小説」「自然主義文学」「田園文学」「プロレタリア文学」それぞれに対し、評価すべき点と問題点があることを指摘し、彼なりの文学論を折々に披瀝している。彼は自分が書く大衆文学の意義を考えるために、芸術のための文学ではなく社会改革のための文学を志向するとともに、運動と文学を結合することへのこだわり乃至は悩みを抱えていた。一方で、「通俗小説」作家として、大衆読者を意識した良質の文学を書きたいとの思いもありながら、十分に構想を練る時間的余裕がないことに日々苦しめられていた。

「農民文学」の志を、「通俗小説」に活かしたものとして、都会に憧れて都会に出ていき、不幸になる農村の女性をヒロインに据えた作品がいくつかみられる。また、1936年に『婦人倶楽部』に連載した『合歓の並木』(1937年 大日本雄弁会講談社より単行本として

出版)は、近代化の中で疲弊する農村の母(母自身は苦勞の連続、農業をついだ息子たちも不遇に、都会にでていった娘たちも不幸になってしまう)の一生を淡々と描いた長編小説で、自然主義的な作風によって、農民小説とく女が読む小説>をアウフヘーベンして合体させた象徴的な作品といえる。

しかし、都会をめざし農村を捨てたことへの悔悟や後ろめたさが彼の頭をはなれることは終生なかったと言えよう。「農民文学」を志しながら農村を捨てたということ、故郷で父母を支えて苦しい農業をしている弟への罪悪感を彼は常に感じていた(特に加藤[1931a])。その罪悪感を解消するためにも、トルストイや二宮尊徳の思想を信条とし、「義民」話や田中正造など農民のために献身した人物を長編作品として描きたいという願いを抱きつつ、生活に追われてなかなか実現できない焦燥も抱えていた(加藤[1924]、加藤[1935]など)。

加藤武雄が晩年に取り組んでいたのは、田中正造を題材とした歴史小説であった。名主の家に生まれ、自由民権運動の流れの中で衆議院議員となった田中は、足尾銅山鉍毒事件の際に農民の側に立って議会で闘い、議員辞職後には明治天皇に直訴しようとした事件でもよく知られる政治家である。戦後に本格的に書こうと資料も収集し執筆しはじめていたという⁶⁾。

4. おわりに 文壇における性差別と文学史の改竄

加藤武雄は、「投書家あがり」の「通俗小説」作家として、文壇上不利な立場におかれることもあったし、女性向けの「通俗小説」を生活に追われて量産することへの自己卑下を内面化もしていた。しかし、都市ブルジョアに対して低学歴で経済的に苦しい農民・労働者階級、弱い立場にある子どもや女性、母親の立場に、共感や自己同一化する性情を有していた。それを活かした文学を生み出したいとの熱意は、少年期の投書家時代から晩年の歴史小説を目指したころまで一貫して続いていた。理想の文学について彼が書き残した文章は多い。また、そうした志に基づいて書かれた作品群 - 農民文学のみならず「通俗小説」にもまた、加藤武雄独自のヒューマニズムが表現されている。彼の文学観と作品論については、稿をあらためて執筆したい(加藤の文学論については「農民文学とく女が読む小説」『通俗小説』のはざままで」と題する別稿を、『大阪大学教育学年報第21号』(2016年3月発行予定)に発表予定である)。

最後に、あらためて、狭義の「通俗小説」とは何だったのかを問いたい。

ある時は「大衆小説」の仲間入りをし、ある時は排除される。そうした葛藤を抱えた位置に常にあった。それは、女性が主たる読者である(にちがいない)という観念から生じる。

実際には、「(現代物)通俗小説」は女性のみならず男性も好んで読んで居た。恋愛や親子、家族、都会的な風俗に関わる小説は、男性にとっても娯楽的な意味をもっていたに違い

ない。恋愛のみならず、「(現代物) 通俗小説」にはかなりなまめかしい性的な描写が多いことは、男性読者を惹きつけた要因の一つになっただろうと考えられる。

にもかかわらず、「(現代物) 通俗小説」は大正時代に新しく台頭した女性読者層によって、文学の世界が「世俗化」「墮落」した結果生まれたものと考えられた。男性を主たる読者とした（とされている）「時代小説」には、＜女が読む＞「(現代物) 通俗小説」と、同じカテゴリーにみなされることを成立当初から拒否する動きがあった。1920年代に提唱された「大衆文藝」「大衆文学」は、「(現代物) 通俗小説」を排除する文学運動を意識的に展開した。しかし、その後、鈴木貞美が整理したように、広義の「大衆文学」ジャンルという考え方が広がり、それには「時代小説」「探偵小説」「(現代物) 通俗小説」が含まれるようになっていく（鈴木 [2009]）。その背景にはマスメディアの最初の爛熟期があり、1930年代には、大衆的な読書欲求は性別を問わずに高まり、それほどジェンダーによって区分されるようなものではない実態（2-2 で紹介した佃の調査のような）が知られていたからではないかと考えられる。

しかし、戦後復興を経て、「純文学」と「大衆文学」の区別を前提とした上で、「中間小説」という定義が登場した頃、あらためて文学史の修正がおこなわれた。それらをおこなったのは、「大衆文学」を好んで研究した男性知識人たちであり、彼らは、狭義の「通俗小説」をできるだけ排除、周辺化したいという欲求を露骨に表現しつづけた。そうした欲求の依って立つ根拠は、「(現代物) 通俗小説」は＜女が読む小説＞だという先入観と、「チャンバラ」ものに少年時代から心躍らせた記憶が彼等にあるからではなかったか。都会のモダンガール、恋愛と処女の蹂躪・夫婦不和と仲直り・離ればなれの親子愛ものなど、感傷的でお涙頂戴、少しエロティックな（表現の下で、近代家族と家父長制、新しい性道徳といった男女両性にとって重要なテーマを扱った）「(現代物) 通俗小説」を男性読者も楽しんで享受していた事実あるいはその可能性は無視された。

ブルジョア的エリート主義の立場からでも、マルクス主義エリート主義の立場からでもなく、大衆が好む文化こそ価値があり考察する意義があると考え、いわば＜民衆派リベラル左翼＞が戦後に意欲的に活躍したことの意義は理解できる。だが、その活動の中で、暗に男性向けのジャンルとされる「時代小説」だけがとりあげられ、女性向けジャンルとされる「(現代物) 通俗小説」は顧みられることがなかった。これは、単に軽視したということではなく、積極的に「女性領域」を排除し、文化さらには学術の世界における性差別を構築する、いわば歴史の改竄だったと言うべきだろう。

注

- 1) 本稿は、筆者による＜女が読む小説＞についての一連の社会学的研究（木村 (2004)、木村 (2006)、木村 (2010)、木村 (2015)）の続稿に位置付く。本稿中で戦前の文献について引用する場合、読みやすさを重視し、現代的仮名遣いや時に旧漢字を当用漢字に置き換えている。

- 2) 工藤 (1988) は、森本の「みかん水」の例えは、千葉の「子供の為の有毒な菓子」という例えを意識して論じたのではないかと推察している。
- 3) 明治期の「文学」概念枠組みの形成、大正・昭和期の「純文学」「大衆文学」「通俗小説」「時代小説」「探偵小説」などの概念枠組みの変遷については、多くの文献・多くの議論があるが、その理解のためには、鈴木 [2009] の 86 頁、89 頁、96 頁に記載された図式的な整理が有益である。鈴木は、明治期の「純文学」概念は「大衆文学」に対比されるものではなく、昭和期以降に生じた「純文学」対「大衆文学」の図式が明治時代から存在していたような議論を明確に否定している (97 頁：鈴木 [2009])。
- 4) 小森陽一は菊池寛の最初の通俗小説として『真珠夫人』を持ち出した際、『真珠夫人』の「真珠」とは、要するに美貌のことです (134 頁：安岡ら [2003]) と述べている。小森氏が『真珠夫人』をまともに読んですらいらないことを、はしなくも露呈する発言となっている。菊池寛の『真珠夫人』の「真珠」とは、妖婦のように振る舞う主人公瑠璃子が、金の力にも暴力にも種々の誘惑にも屈せず、生涯守り通した、初恋の男性に対する「心と肉体との操」(576 頁：菊池寛『真珠夫人』2002 年出版の文春文庫版) のことである。「真珠」とは何か、この小説のもっとも重要なテーマであり、そのことは最後まで読まずとも容易に気がつくことだ。ことほどさように、通俗小説・大衆小説を論じる男性知識人は、自分が関心のあることにだけ目を向けるという、研究者にあるまじき行為を、無意識のうちに、実に無邪気な態度で冒すことを指摘しておきたい。小森陽一氏発言の「不備」は、決して珍しいものではない。
- 5) 木村 (2015) では、「加藤武雄 (1888 ~ 1956) 主要小説作品と発表後の展開状況」をまとめた。この一覧から、加藤武雄が戦前いかに活躍した作家であったか、最初に新聞雑誌などに発表された作品が、まず単行本になり、その後、文庫として再版されたり、全集に収録されたり、さらには映画化されたりと、何度もひとつひとつに享受されていたことがわかる。また、戦後に粗末な紙質や装幀ながら、つぎつぎと加藤の作品が再版されている状況にも注目したい。太平洋戦争中の物資不足やマスメディア統制の下、「文化」に飢えていたひとつひとつが、再版された大衆小説を大いに歓迎したことが推測できる。またこの表では、恋愛・家庭をテーマとした現代もの「通俗小説」の長編、「文学志向」の短編、歴史小説、子ども・少年少女向け小説などをどのようにかき分けていったのかのプロセスも追うことができるよう、記号を加えている。
- 6) 田中正造についてはすでに昭和 6 年に「谷中村の滅亡-田中正造素描」として『文学時代』に発表している。戦後に本格的長編として発表した『叛逆』は、明智光秀とともに織田信長を討った斎藤内蔵助の物語である。

加藤武雄による文学論とそれに関わる随筆など

加藤武雄 (1917), 「芥川龍之介氏を論ず」, 『新潮：作家論特輯』大正 6 年 1 月号

加藤武雄 (発表時ペンネーム 小林愛川) (1917), 『明治大正文学早わかり』新潮社

- 加藤武雄 (1924), 『わが小畫板』 新潮社
- 加藤武雄 (1926a), 「十五年小説壇の諸家」, 『文章倶楽部』 第 11 卷 12 号, 新潮社
- 加藤武雄 (1926b), 「農民文学とは何ぞや 農民文芸会座談会」, 『文章倶楽部』 第 11 卷 12 号 新潮社
- 加藤武雄 (1926c), 『文芸入門叢書第二編 明治大正文学の輪郭』 新潮社
- 加藤武雄 (1926d), 『小説の作り方 (入門百科叢書)』 新潮社 (1947 大泉書店 再版)
- 加藤武雄 (1926e), 「巻末に」, 『短編集 桑の実』 新潮社
- 加藤武雄・犬田卯 (1926), 『農民文藝の研究 (農民文藝叢書 2)』 春陽堂
- 加藤武雄 (1928), 「巻首に」, 『龍膽』 宝文社
- 加藤武雄 (1930), 「文学の使命」, 『近代思潮講演集』 大阪毎日新聞社
- 加藤武雄 (1931a), 「弟に寄す」, 加藤哲夫 (1931), 『農民哀歌』 天人社
- 加藤武雄 (1931b), 「ジャーナリズムと『創作』」, 『総合ジャーナリズム講座第十卷』 内外社
- 加藤武雄 (1931c), 「谷中村の滅亡-田中正造素描」, 『文学時代』 第 3 卷第 7 号 新潮社
- 加藤武雄 (1932a), 「『好色五人女』 鑑賞」, 『日本文学講座第十四卷 鑑賞附補遺』 新潮社 刊
- 加藤武雄 (1932b), 「回顧十七年」, 『文学時代』 昭和 7 年 7 月号 新潮社
- 加藤武雄 (1932c), 『文藝隨筆』 玉川学園出版部
- 加藤武雄 (1932d), 『砧村隨筆』 玉川学園出版部
- 加藤武雄 (1933), 「家庭小説研究」, 『日本文学講座 第 14 卷 大衆文学篇』 改造社
- 加藤武雄 (1935), 『郊外通信』 健文社
- 加藤武雄 (1936a), 「木食上人」, 文藝家協会編『昭和隨筆集第二卷』 日本学芸社
- 加藤武雄 (1936b), 「秋宵四方山話 出席者を困んで (竹越三叉、木村毅、長田幹彦、近 松秋江、加藤武雄)」, 『文藝懇話会 加藤武雄編集号』 昭和 11 年 11 月号
- 加藤武雄 (1936c), 「民謡その他」, 『文藝懇話会』 第 1 卷第 1 号
- 加藤武雄 (1936d), 「卓上小閑」, 『文藝懇話会』 第 1 卷第 7 号
- 加藤武雄 (1937), 『子供を育てる母のよみもの』 敬文館
- 加藤武雄 (1938), 「『新潮』の功績」, 『新潮 四百号記念』 第 35 年第 1 号 新潮社
- 加藤武雄 (1940a), 「大衆小説の研究 (一)」, 『現代文章講座第一卷』 三笠書房
- 加藤武雄 (1940b), 「大衆小説の研究 (二)」, 『現代文章講座第二卷』 三笠書房
- 加藤武雄 (1940c), 「文学と生活」, 『ラヂオ講演・講座』 日本放送出版協会
- 加藤武雄 (1941a), 『隨筆青草』 道統社
- 加藤武雄 (1941b), 「巻末に記す」, 『土の偉人叢書 二宮尊徳』 新潮社
- 加藤武雄 (1941c), 「上海その他」, 三木清ほか共著『上海』 三省堂
- 加藤武雄ほか (1942), 『国民文学の構想』 聖紀書房
- 加藤武雄 (1943a), 「鑑賞といふことに就て」, 『趣味の思索』 教材社

- 加藤武雄 (1943b), 『少女と教養』 淡海堂出版
 加藤武雄 (1947), 「卷末にしるす」, 『美しき朝』 泰文館
 加藤武雄 (1949a), 『我が日我が夢』 大衆文藝社
 加藤武雄 (1949b), 「横顔 我が文壇生活回顧」, 『文章倶楽部』昭和24年3～8月号新潮社(和田傳監修 (1982), 『加藤武雄読本 望郷と回顧』 加藤武雄読本刊行会再録)
 加藤武雄 (1949c), 「中村武羅夫君を悼む」, 『新潮』 昭和二十四年七月号 新潮社

引用・参考文献

- 安西愈編 (1957), 『故加藤武雄先生追悼文集おもかげ はぐさ臨時増刊』 城山町はぐさ会
 安西愈 (1972), 『加藤武雄年譜』 私家版
 安西愈 (1979), 『郷愁の人 評伝加藤武雄』 昭和書院
 安西愈 (1982), 「加藤武雄年譜抄・解説」, 和田傳監修『加藤武雄読本 望郷と回顧』 加藤武雄読本刊行会 (発行人加藤哲夫)
 青野季吉 (1927), 「女性の文学的要求」, 『転換期の文学』 昭和2年3月号
 荒正人 (1959), 「大衆文学史」, 『岩波講座日本文学史第十四巻近代』 岩波書店
 荒正人・武蔵野次郎 (1959), 『大衆文学への招待』 南北社
 Beetham, M. and Heilmann, A. (eds.) (2012), *New Woman Hybridities: Femininity, Feminism, and International Consumer Culture, 1880–1930*, Routledge
 千葉亀雄 (1923), 「新聞記者としての立場からみた日本の現在の文藝 - 高級芸術と通俗小説との一線」, 『新潮』 大正12年3月号
 千葉亀雄 (1930), 「新聞小説論」, 『総合チャーターリズム講座第一巻』 内外社
 Eagleton, T. (1983), *Literary theory: an introduction*, Blackwell (=1980), 大橋洋一訳『文学とは何かー現代批評理論への招待』 岩波書店
 畑有三・山田有策編 (2005), 『日本文芸史 近代Ⅱ表現の流れ』 河出書房新社
 林房雄 (1928), 「プロレタリア大衆文学の問題」, 『戦旗』 昭和3年1月号 (=1956『現代日本文学論争史 上』 所収)
 日高昭二 (2010), 「通俗小説という問題」, 『日本近代文学』 83号、日本近代文芸会
 日沼倫太郎 (1966), 『純文学と大衆文学の間』 弘文堂新社
 平林初之輔 (1929), 『文学理論の諸問題』 千倉書房
 平野謙 (1963), 『昭和文学史』 筑摩書房
 平野謙・小田切秀雄・山本健吉編 (1956), 『現代日本文学論争史 (上・中・下)』 未来社
 本田康雄 (1998), 『新聞小説の誕生』 平凡社
 今村仁司 (1996), 『「大菩薩峠」を読むー峠の旅人』 筑摩書房
 井口一男 (1965), 「大衆文学をめぐる論争」, 『国文学』 1月臨時増刊号
 伊集院齊 (1935), 『大衆小説論 日本大学芸術学科講座 文藝篇』 日本大学出版部
 伊集院齊 (1942), 『大衆文学論』 櫻華社出版部

- 飯田祐子 (1998), 『彼らの物語—日本近代文学とジェンダー』 名古屋大学出版会
- 池田浩士 (1983), 『大衆小説の世界と反世界』 現代書館
- 池田浩士 (1986), 「大衆文学、読者論の視点から」, 『國文學 大衆文学・物語のアルケオロジー』 第 31 卷第 9 号, 學燈社
- 池田浩士責任編集 (1997), 『文学史を読みかえる第二巻＜大衆＞の登場—ヒーローと読者の二〇～三〇年代』 インパクト出版会
- Jay, D. (1998), *The Romantic Fiction Of Mills & Boon, 1909-1995 (Women's and Gender History)*, Routledge
- 片岡良一 (1934), 『現代作家論叢—新現実主義の人々へ—』 三笠書房
- 片山昇 (1926), 「作者と読者」, 『新潮』 大正 15 年 3 月号
- 加藤哲夫 (1931), 『農民哀歌』 天人社
- 加藤正彦 (2010), 『伯父 加藤武雄』 私家版
- 加藤周一 (1980=1999) 『日本文学史序説 下』 筑摩書房 (ちくま学芸文庫)
- 河上徹太郎 (1949), 『近代文学論』 創元社
- 菊池寛 (1988), 『話の屑籠と半自叙伝』 文芸春秋社
- 菊池幽芳 (1915=1924), 「新聞小説の未来」, 『幽芳全集』 至誠堂書店
- 木村毅 (1931), 『大衆文学とジャーナリズム』 三省堂
- 木村毅 (1979), 『私の文学回顧録』 青蛙房
- 木村涼子 (2004), 「＜女が読む小説＞の誕生—1920～1930年代の通俗小説の展開」, 『大阪女子大学人間関係論集』 第 21 集
- 木村涼子 (2006), 「＜女が読む小説＞による欲望の編成—1920～1930年代の『通俗小説』の世界」, 『大阪大学人間科学研究科紀要』 第 32 卷
- 木村涼子 (2010), 『＜主婦＞の誕生—婦人雑誌と女性たちの近代』 吉川弘文館
- 木村涼子 (2015), 「大衆文学とジェンダー研究のために: 「通俗小説」作家・加藤武雄作品ビブリオグラフィー」, 『大阪大学教育学年報』 第 20 卷
- 工藤哲夫 (1988), 「大正十四年に於ける通俗小説論議」, 『女子大國文』 103 号 京都女子大学国文学会
- 桑原武夫 (1950), 『文学入門』 岩波新書
- Longhurst, D. (2014), *Gender, Genre & Narrative Pleasure (Routledge Library Editions: Women, Feminism and Literature)*, Routledge
- 前田愛 (1973), 『近代読者の成立』 有精堂
- 三上於菟吉 (1935), 『隨筆わが漂泊』 サイレン社
- 水守亀之助 (1943), 『わが文壇紀行』 朝日新聞社
- 森本巖夫 (1925), 「所謂通俗小説とその作家」, 『新潮』 大正十四年三月号
- 椋棒哲也 (1998), 「加藤武雄『郷愁』について」, 『立教大学日本文学』 第 79 卷 立教大学日本文学会

- 村松定孝 (1964), 「家庭小説雑感」, 『大衆文学研究』1964・Ⅲ、南北社
- 永嶺重敏 (1997), 『雑誌と読者の近代』日本エディタースクール出版部
- 中島健造 (1952), 「第47巻 昭和十年代第2解説」, 『現代日本小説体系』(河出書房版 解説集成第三巻) ゆまに書房
- 中村星湖・和田傳・相田隆太郎・石原文雄・須賀田正雄・鏑田研一 (1956), 「加藤武雄を偲ぶ」, 『農民文学』11号 日本農民文学会
- 中村光夫 (1968), 『日本の現代小説』岩波新書
- 中村武羅夫 (1930), 『誰だ! 花園を荒す者は?』新潮社
- 中村武羅夫 (1933), 「通俗小説研究」, 『日本文学講座 第14巻 大衆文学篇』改造社
- 中村武羅夫 (1946), 「文壇と新潮」, 『新潮 創刊五百号記念』新潮社
- 中谷博 (1934), 「大衆文学本質論」, 菊池實など編『日本文学講座』第8巻 文藝春秋社
- 中谷博 (1948), 「大衆文学の歴史」, 『思想の科学』Vol.3.No.8 先駆社
- 中谷博 (1973), 『大衆文学』桃源社
- 成田龍一 (2006), 『「大菩薩峠」論』青土社
- 野口英次 (2013), 『故郷 近代女性像の作家 加藤武雄の文学について』私家版
- 小田切秀雄編、犬田卯著 (1977), 『日本農民文学史』農山漁村文化協会
- 岡保生・和田芳恵 (1980), 「現代小説」, 『大衆文学体系 別巻 通史資料』
- 大宅壮一 (1926), 「文壇ギルドの解体期」, 『新潮』大正15年12月号 新潮社
- 尾崎秀雄・武蔵野次郎編 (1961-66), 『大衆文学研究』各号、南北社
- 尾崎秀樹 (1964), 『大衆文学』紀伊國屋書店
- 尾崎秀樹 (1965), 『大衆文学論』勁草書房
- 尾崎秀樹 (1969), 『大衆文学五十年』講談社
- 尾崎秀樹・多田道太郎 (1971), 『大衆文学の可能性』河出書房新社
- 尾崎秀樹・岡保生・和田芳恵・中島河太郎 (1980), 『大衆文学大系 別巻通史』講談社
- 尾崎秀樹 (1980), 「昭和前期の家庭・通俗小説」, 『名作挿絵全集 第六巻』平凡社
- 尾崎秀樹 (1986), 「変貌する大衆文学」, 『国文学』第31巻9号 学燈社
- 尾崎秀樹 (1989), 『大衆文学の歴史 (上下二巻)』講談社
- 尾崎秀樹・前田愛・山田宗睦 (1982), 『現代読者考』日本エディタースクール出版部
- Radway, J.A. (1991), *Reading the Romance: Women, Patriarchy, and Popular Literature*, University of North Carolina Press
- 瀬沼茂樹 (1957), 「家庭小説の展開」, 『文学』12月号 岩波書店
- 新潮社編集部 (1938), 『新潮 四百号記念』第35年第1号 新潮社
- 新潮社出版部編 (1935), 『新潮社四十年』新潮社
- 佐藤俊夫 (1966), 『新潮社七十年』新潮社
- 鈴木貞美 (2009), 『「日本文学」の成立』作品社
- 多田道太郎 (1962), 『複製芸術論』勁草書房

- 大衆文学研究会編 (1966), 『大衆文学研究への招待』 南北社
- 高倉テル (1936), 「日本国民文学の確立」, 『思想』 昭和 11 年 8・9 月号 岩波書店
- 谷沢永一 (1978) 『完本 紙つぶて』 文藝春秋社
- 外山滋比古 (1969), 『近代読者論』 みすず書房
- 都河龍 (1931), 「婦人雑誌の編輯」『総合ジャーナリズム講座 第十巻』 内外社
- 佃実夫 (1954), 「勤労者の読書と大衆文学 どのようなものをどのくらい読むか」, 『思想の科学研究会編集『思想の科学 特集・読者の問題』 第 8 号 講談社
- 鶴見俊輔 (1955), 『大衆芸術』 河出書房
- 鶴見俊輔 (1962), 『限界芸術論』 勁草書房
- 鶴見俊輔 (1975), 『鶴見俊輔著作集 第四巻芸術』 筑摩書房
- 鶴見俊輔 (1985), 『大衆文学論』 六興出版
- 和田傳監修 (1982), 『加藤武雄読本 望郷と回顧』 加藤武雄読本刊行会 (発行人加藤哲夫)
- 和田芳恵 (1967), 『ひとつの文壇史』 新潮社
- 矢部憲市 (1975), 「『悩ましき春』について 加藤武雄ノート」, 『大衆文学論義』 第 2 号 日本大衆文学会
- 山本歩 (2015), 「加藤武雄『悩ましき春』考: 加藤武雄の「文章世界」体験として」, 『阪神近代文学研究』 第 16 巻 阪神近代文学研究会
- 山本昇 (1995), 「加藤武雄ノート」, 『解釈』 481 号 解釈学会
- 安岡章太郎・井上ひさし・小森陽一 (2003), 「大衆文学 戦前編」, 井上ひさし・小森陽一編著『座談会 昭和文学史三』 集英社
- 吉田精一 (1963), 『現代日本文学史』 筑摩書房
- Zuckerman, M.E. (1998), *a History of Popular Women's Magazines in the United States, 1792-1995*, Greenwood Press
- 生前の加藤武雄氏についてのお話、加藤武雄関連の私家版や生家に残された貴重な史料、公的施設に寄贈された蔵書リストなどについて、氏のご親族である加藤正彦さま、池部節子さま、加藤とし子さま、加藤彪さまなどのご協力を何度も頂戴した。みなさまのご厚意なしには、本研究は成立しなかった。あらためてお礼を申し上げたい。
- 本研究は科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）基盤研究C:研究課題「1930～50年代マスメディアと女性—内容分析とライフヒストリー調査の結合」（研究代表者 木村涼子）の助成を受けておこなったものである。

Meaning of Writing Popular Literature for Women in Modern Japan: Gender Politics in Literature and the “Forgotten” Popular Writer, KATO Takeo

Ryoko KIMURA

Abstract

This study considers the gender perspective and paper aims to analyze the history of popular literature for women in Japan from the gender perspective. In modern Japan, both popular literature (*taishu-bungaku* or *tsuuzoku-shosetsu* in Japanese) and serious literature (*jun-bungaku* in Japanese) developed with the mass media. The increase in the number of educated and literate women led to the development of women’s magazines and popular literature for women. Many of the earlier writers for popular women’s magazines have been lost to history, as the ranking system in the world of literature considered popular literature for women to be on an inferior level. This study traces the process by which popular literature for women, published mainly in women’s magazines or newspapers, was excluded from not only the *jun-bungaku* category but also the *taisyu-bungaku* category during both the prewar and postwar periods. The process indicates an aspect of gender politics in the Japanese literary world. Regarding gender politics, Kato Takeo, who is one of these forgotten popular writers, had been uncomfortable about writing novels about love or family affairs mainly for women readers. In contrast, he also wrote essays on literature that explored the value and significance of those novels. Focusing on Kato Takeo, we consider what it means for a male writer to write popular literature for women in modern Japan, exploring the multiple conflicts inherent in this position.